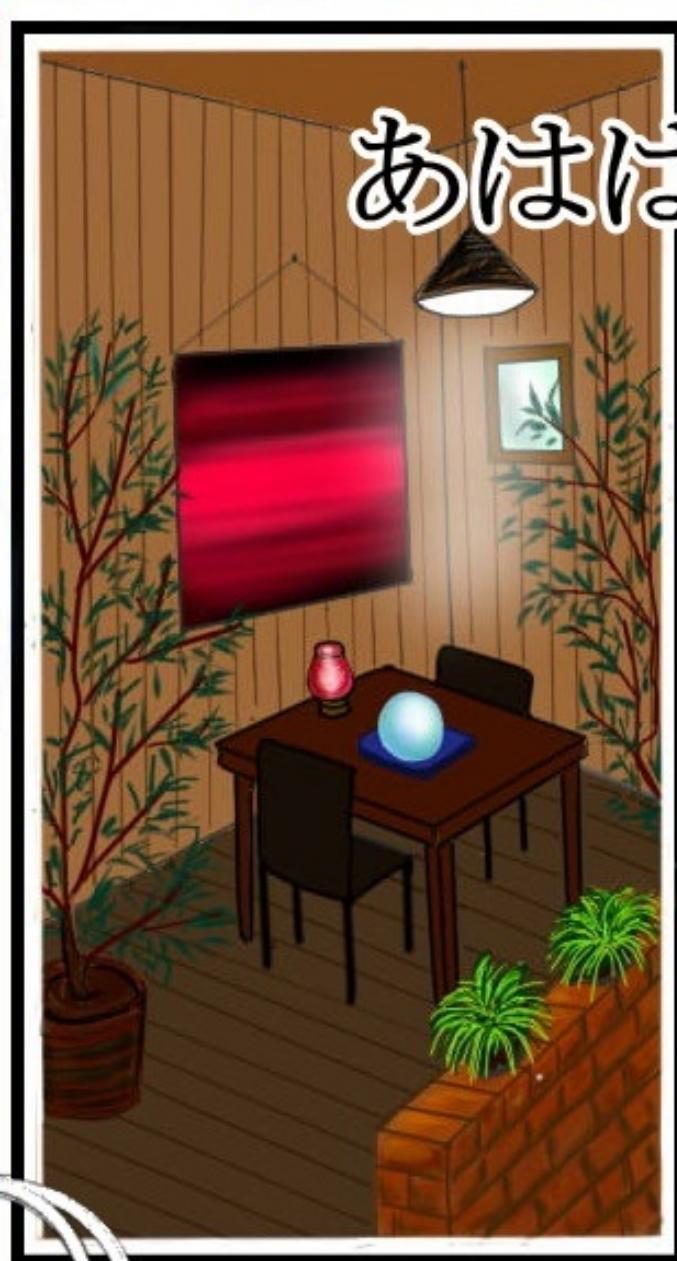
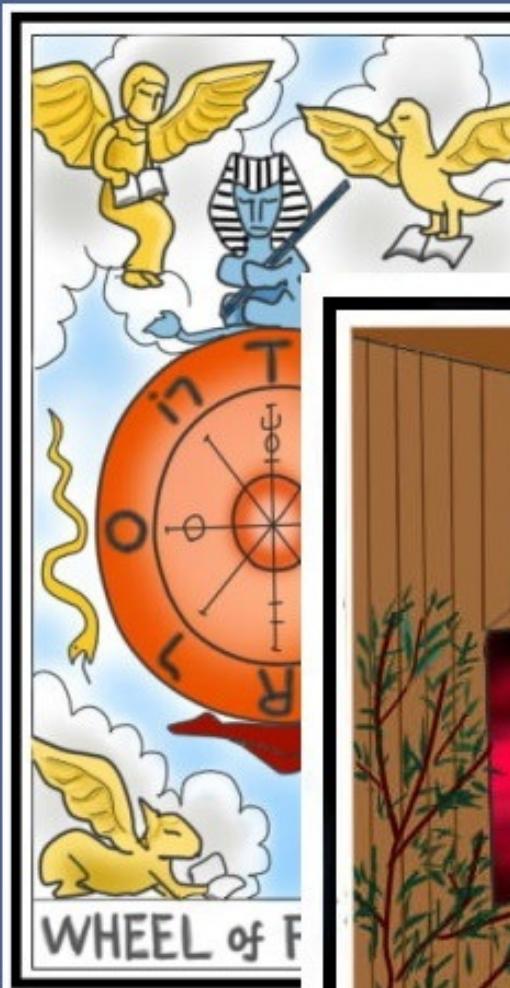


占いカフェの 片隅で



決意

カフェを手伝うことは、2、3日考えさせてと言ったのに、
せっかちな友里は、翌朝すぐに電話をかけてきた。
電話に出るといきなり、「決めた？決めたよね？」
「どなたですか？どちらへおかげですか？」
しらっとした声で真美がそう答えるも、友里は全く動じない。

「真美さんにかけてまーす。
私のカフェで働くことに決めた真美さんに」

友里は真美に対しては、何事も待ったなしで強引だ。
そんな友里のことを、うつとうしく感じながらも、その強引さが羨ましかった。
翌朝に電話をかけてくるとは友里らしい。

「2、3日、考えさせてって言わなかった？」
「もう答えは出てるんじゃないの？」
「会社の都合もあるしね」
「会社なんて、真美が辞めるって言えば、辞められるでしょ？」
「あのさ、会社を辞めるには、手続きが必要なの」
「そんな事ぐらい知ってるよ。じゃあすぐに手続きしてきて」
「そう簡単にはいかないわよ」

「私のカフェ、手伝ってくれるよね？」
「手伝ってあげたいとは思うけど…」
「もう答えは出てるんでしょ？会社を辞めることも」
「なんとなくね」
「ほら、やっぱりそうだ。真美はもう決めてるじゃない？」
真美は何も答えずに、「フー」とため息をついた。
「ねえ、はっきり答えてよ。手伝ってくれるよね？」
「まあいいけど…」
友里の勢いに押されて真美はそう答えた。

決意

「ありがとー！良かった、真美が一緒なら安心。ホントにありがとう。
ねえ、ちょっと聞いてる？マジありがとー！」

友里が何度も「ありがとー」を連呼するのを聞きながら、
上司になんて言おう？と真美は考えていた。
友里のカフェは、真美の会社から近い。
上司や同僚に嘘について辞めても、そのうちバレてしまうだろう。
根が真面目な真美は、正直に話すしかないと思った。

「よく正直に話してくれたね」
真美が童話の中の主人公なら、
こんなふうに褒めてもらえたかもしれないが、
大人の世界は正直に話したからといって、評価されるものでもない。

真美は上司から散々嫌味を言われた。
嫌味を言わなければ言われるほど、
真美は会社を辞めたいと思う気持ちが強くなった。
嫌味は言われても、それほど強く引き留められなかつたのは、
会社に真美の代わりなどいくらでもいるからだろう。

仕事の引き継ぎを必死に終わらせ、
真美は退社の日を迎えた。
送別会の話も出たが、丁重にお断りした。

同僚から小さな花束を渡されて、ほんの少しうるつとしたが、
会社を後にした途端、何ともいえない爽快感が真美を包んだ。

決意

人は1人では生きてはいけない。
でも、特定の集団の中で、スムーズな人間関係を保ち続けるのは大変だ。
それは、会社だけに限らず、住んでいる地域の集団だったり、
学校という集団だったり、家族という小さな集団だったり。
実の親子でさえ、一緒に暮らすと衝突もする。

ましてや会社は、他人同士が同じ場所で、利害関係を持ちながら、
毎日一緒に仕事をする空間だ。
真美は今の会社が嫌いというわけでもなかった。
話の合う同僚もいた。でも、息苦しかった。
仕事の内容というより、もっと漠然とした何かが息苦しかった。

友里のカフェも、馴染んでいくうち、息苦しい空間になるだろうか？
それとも、オープン初日から、息の詰まる場所になってしまうだろうか？
そんなことより、真美はオープン前に、友里に言わなければいけない事があった。
「カフェで占いはできない」と言うことだ。
友里は、「占いはしなくてもいい、手伝ってくれるだけでいい」と言ったけれど、
「真美はそのうち占いもしてくれるだろう」と、友里が思っていることぐらい、
真美には分かっていた。

真美の占いは自己流だった。
「占いというより、勘で占っている」と言ったほうが、表現としてはピッタリだ。
他の人と比べたら、真美は多少靈感は強いのかもしれない。
真美は人の体から出ている『気』のようなものを感じることができた。
でもそれは、はっきりと目に見えるものではなかった。
見えないけど、なんとなく感じる。うまく説明できないけれど。
それは皆が持っている感覚だと、真美はずつと思っていた。
それが真美だけの感覚だと分かったのは、高校3年の2学期だった。

不思議な能力

その日、担任の教師の体から、今まで感じたこともないような、
チクチク、ドロドロしたものを感じた真美は、隣の席の大和美穂に言った。
「今日の先生、ちょっとおかしくない？嫌なことでもあったのかな？」
なんか急に怒り出しそうな気がする」
「え？そう？いつもと変わんないよ。真美こそ変だよ、そんなこと言うなんて」

担任の栗山先生は、30過ぎの女の先生で、担当教科は英語。独身。
美人というより、カワイイタイプ。性格は穏やかで、授業も分かりやすい。
あだ名はクリリン。男子生徒には特に人気があった。

その日の5限目は、クリリンの英語だった。
生徒が多少ふざけても、クリリンはうまくかわす。
「先生～！目の前が真っ暗で、黒板が見えませーん」
授業の初めに男子生徒の誰か1人が必ずと言っていいほどクリリンにからむ。
お決まりのパターンだった。
「サングラスをはずしなさい。そうすれば目の前は明るくなります」
「先生がまぶし過ぎて、サングラスを外すことなんてできません！」

おふざけの時間は1～2分で終わる。しつこくはやらない。
その短い時間で、クリリンを怒らせることはできるのか？
「絶対に怒らない」という予想がクラスの約半数。
残りは「いつか怒る」、「いつか泣く」が半々。

「せんせー！やっぱりサングラスをかけないと見れませーん！」
クリリンは適当にあしらって授業を進めるだろう、と皆が思っていた。
「サングラスをはずしなさい」クリリンは静かに言った。
「せんせー！サングラスが顔にくっ付いて取れましょーん！」
「静かにッ！」
クリリンは持っていた教科書で、教卓をバンッ！と叩いた。
クラスはシーンとなった。こんなことは初めてだった。
授業の終わりを告げるチャイムが鳴るまで、教室は緊張した空気に包まれた。

不思議な能力

授業の終わりを告げるチャイムが鳴っても、
クリリンは時間をオーバーして授業を続けることが度々あったが、
その日はチャイムが鳴ると同時に、「終わります」と不機嫌そうに言った。
そして、当番の子が「起立」と言う前に、さっさと教室を出て行ってしまった。

「起立、礼もなしかよ？」
「どうなってんの？今日のクリリン？」
「ついに怒ったな」
「職員室で泣いてるんじゃない？」
「ヤバクね？」
皆が騒ぎ始めた。

真美が教科書をしまっていると、急に隣の席の大和美穂が立ち上がった。
クリリンの授業で緊張していたせいか、真美はビクッとした。
「ちょっと真美、すごいじゃん。クリリン、怒ったね。真美の予言が当たったー！」
美穂は真美の肩をバシバシ叩きながら、「すごい、すごいよ」と何度も言った。
「ちょっとやめて、痛いよ。それに、私は予言なんかしてないよ」
「真美ってさ、靈感があるのかも」
「靈感？」
真美が美穂のほうに顔を向けると、顔をグイッと両手で挟まれた。
「美穂やめて！何すんのよ！」
「ねえ、私のことも何か見える？」
「何が？」
「だから、私のことも靈視して」
「そんな事言われても、何にも見えないよ」
「ホントに？」
「私は靈感なんて無いから」
「ぜんぜん？」
真美はコクリと頷いた。
美穂のことなんて、本当になんにも分からなかった。

不思議な能力

「じゃあ、クリリンのことはどうして分かったの？」
「分かんないよ。何となくクリリンの様子が気になっただけ」
「オーラとか見えるの？」
「ううん。見えない」
「人の考えてることが、テレパシーで分かるとか？」
「ぜんぜん分かんない」
「ふ～ん、ホントに？」
美穂は疑うように真美の顔をじっと見つめた。

「ねえ、隠さないで私には本当のことを教えなさいよ」
「何も隠していないよ。クリリンの様子がいつもと違うなって思っただけ」
「どんなふうに違ったの？」
「んー、うまく言えない。ただ...」
「ただ？」
「先生、学校辞めちゃうのかなあ？って。
あ、今のは取り消し。私の口ったら、思ってもないこと言うんだから」
真美はあわててごまかした。
「クリリン辞めるの？」美穂は目を丸くしている。

「違うってば。そういう意味じゃないよ」
「ふ～ん、じゃあどういう意味？」
真美が黙っていると、美穂は「まあいいわ」と言って、
教室から出て行った。

実はその時、真美は自分でも驚いていた。
なぜかって？
先生が辞めることを、自分の頭が感じる前に、口が勝手に動いて喋ったから。
嘘みたいだけど本当の話。
美穂には否定した真美だったが、
クリリンはもう、学校には来ないような気がした。

不思議な能力

次の日も、その次の日も、クリリンは学校には来なかった。
副担任からは「お家の都合でお休みされます」という説明があり、
クリリンの授業は自習になった。
「栗山先生が退職する」と聞かされたのは、
それから1週間ほど経った頃だった。
退職の理由は、「一身上の都合」。

「無責任だ」「退職理由をきちんと説明しろ」と、
保護者から声が上がったが、
納得がいくような説明はされなかった。

「栗山先生は妊娠したんじゃないか?」という噂も流れたが、
結局、真実は分からぬまま3学期になり、
真美のクラスの担任は、副担任が引き受けた。

クリリンは妊娠なんかしていない。
家の都合で辞めたのでもない。
真美は直感的にそう思った。
「嫌になったんだ」
「え?何が嫌になったの?」
美穂が真美の顔を覗き込んでいた。
「あ、なんでもない。眠くてだるくて嫌になっただけ」
真美は適当にごまかそうとしたが、
美穂は納得しなかった。

「栗山先生のこと、また何か見えたんでしょ?ねえ、教えなさいよ」
真美が黙っていると、美穂はムッとした顔をして「ケチ!」と言った。
その声がけっこう大きくて、真美もムッとした。

不思議な能力

クリリンが退職したこと、真美にも変化があった。

「真美はクリリンが学校を辞める事を予言した」

そう美穂が騒いだせいで、

真美は靈感があるという噂が流れた。

どんなに真美が否定しても、噂は広がり続けた。

テスト前になると、真美はクラスメイトから頼りにされた。

「今度のテスト、どこが出るか予言して！」

「分かんないよ、そんなの」

「分かんなくてもいいから、適当に出そうなところを言ってみて」

しつこく頼まれて、しぶしぶ山を掛けても、半分当たればいいほうだった。

それでも懲りないクラスメイトは、今度は真美に「占って！」と言い始めた。

占いも断りきれずに、トランプを使ったりして占うふりをした。

真美は勘で答えているだけで、本当は占いなどできないのだ。

それでも全部はずれるかというと、真美が何気なくつぶやいた言葉が、

「すごく当たった」と言う子もいて、放課後になると真美の周りには、

占い好きの女子が集まってきた。

気が付くと真美は、学校内でちょっとした人気占い師のようになっていた。

大学へ入学すれば、真美も占いとは無関係の学生生活を送れると思っていたが、

不思議なことに、真美の占いは当たるという噂が、出どころは分からないが、

いつの間にか広まって、全く知らない人からも、占ってほしいと言われたりした。

遊びだから気楽にできた占い。ハズレても誰も文句は言わなかった。

でも、友里のカフェで真剣に占うとなれば話は別だ。真美には荷が重すぎた。

駆け引き

「友里、話があるの」

「何よ、真面目な顔しちゃって。

まさか、実は結婚しま～す。なんて言うんじゃないでしょうね？」

「違うから安心して」

「何？さっさと言いなよ」

「……」

友里は溜息をつき、「コーヒーでも入れるわ」と言った。

友里の入れたコーヒーは、豆の香ばしさが感じられて、

真美はひと口飲んだ途端、「あ～」と声が出た。

「では続きを始めます。真美、私に話したい事って何？」

「占いのことだけど、私、やっぱり出来ない」

「なんだ、そのことか。安心して。真美に負担はかけないから」

「でも、せっかく買ったあの椅子とテーブルは？」

友里が用意した占いコーナー用の椅子とテーブル。かなり値が張ったと思う。

「ああ、あれなら置いとく」

「どこに」

「カフェの隅っこに」

「何に使うの？」

「へへへ。このスペースは、真美の人生相談コーナーにします。ジャジャーン！」

「ちょッ、ちょっと待ってよ」

「占いでなければいいんでしょ？」

名前も人生相談の先生ぽい名前で、摩耶先生なんてどう？」

まだ下書きだよ、と言いながら、友里が見せた画用紙には、

摩耶（まや）先生のお悩み相談コーナー！

話すだけでもスッキリ！

占いという言葉こそ使っていないが、

画用紙には水晶玉に手をかざす、不思議な雰囲気の女の絵が描かれていた。

これでは見た人は占いと勘違いするだろう。

友里はいつも強引だ。

駆け引き

「摩耶先生の人生相談？ 何でも勝手に決めないで！」

「真美、堅苦しく考えないで。

何でも当たって砕けろよ。あ、砕けちゃダメだけどさ」

「お店の隅で人生相談やるくらいなら、カフェを手伝う約束はなかったことにして」

「もー、頭が固いんだから。柔軟にいこうよ。気持ちも体も。

真美が摩耶という名で活躍する。私も嬉しい、お客様も喜ぶ。はい決まり！」

「喜ぶのは友里だけでしょ！」

「ああ怖い。真美の体から、怒りのオーラが出てる。あー怖い怖い」

友里の茶化すような言い方が、真美にはカチンときた。

会社も辞めてしまった。友里の言いなりになるのもイヤ。

でも、真美はこの店に出資しているわけでもない。

友里に雇われているただのパート。そう思うと急に悲しくなった。

泣くつもりなんてなかったけど、こらえようとしても、涙があふれてきた。

「え！ 真美泣いてるの？」

友里はビックリしていた。

これまで友里の前で、泣いたことなんてなかったから。

「真美、ごめん、泣かないで」

「だって私…」

涙があふれてきて、うまく話すことができない。

「お願い、泣かないで」

友里がオロオロしているのが伝わってきた。

「占いも人生相談もしなくていいよ」

「うん。うん…」

止めようとしても涙はあふれ続けた。

自分で思っている以上に、真美は不安だったのかもしれない。

会社を辞めて、友里のカフェを手伝って、この先やっていけるだろうか？と。

駆け引き

あの日以来、友里は「占いも人生相談も、真美が嫌ならやらなくていい。カフェを手伝ってくれるだけでいい」と、しつこいくらい言い続けた。

でも、そのうち機嫌を直して、占いもしてくれるだろうと思っているのか、カフェの片隅のあのテーブルの上には、パワーストーンやエジプトカードが並べてあった。

真美がパワーストーンを眺めていると、友里が嬉しそうな顔をして近寄ってきた。

「真美もパワーストーンは好きでしょ？ 確かエジプトカードも持ってたよね？」

友里はエジプトカードを真美の手に握らせた。

新品のエジプトカードに、真美も少なからず興味があった。

「あれ？ セトのカードが黒だ」

真美が持っているセトのカードは背景が赤色なのに、友里が買ったカードのセトは、背景が黒だった。

「へ～、真美の持ってるのと色が違うの？ これ、ニセモノ？」

「ニセモノではないと思うよ。私が持ってるエジプトカードは、

本とセットになった『お試し品』みたいなカードだから。

友里が買ったカードのほうが、作りもしっかりしてる」

「カードもちょっとした違いがあるのね。真美がいてくれて良かった♪

私は占いのことなんて、な～んにも分からないんだもん」

それなら、占いにこだわらないで、ただのカフェにすればいいのに、

と真美は思ったが、口には出さなかった。

「さてと、もうお昼か。何か食べに行こうよ。私のおごり！」

そうだ、近くに美味しい重を食べさせてくれるお店があるの。

開店前の準備まで手伝ってもらって感謝してる。お礼は別に包むから」

友里が今までになく真美に気を使うのは、このカフェには真美が必要だからだろう。

オープンの日は目の前に迫っていた。[占いカフェの片隅で（2）終わり。](#) [占いカフェの片隅で（3）へ続く。](#)